

自転車がパンク「あれれ またか・・・」というぐらいによくパンクする。車のパンクはもうタイヤ交換の方法を忘れてしまったというぐらいに無いと言いながら“ゾッ”とした「待てよ、車の中には懐中電灯が無い、タイヤは、工具は何処にしまってあるのか」なんて真剣に考えた「ま いいか・・・」ではすまないもんね、早速に調べようと言いながらそうはしないかな。もうすぐ帰りつく、もうちょっともってくれという祈りも通じず、空気がどんどん減っている、これ以上は無理かと自転車を降りてたった 2,3 分歩いただけだけど、これ以上乗るとタイヤが烈ける、暗がりの中にそのまま自転車を置いて家の中に入いった。朝、あれをして、こうしようと予定を考えながら自転車は乗れない事をすっかり忘れていた。自転車が無いと動きが取れないと思いながら 60 号の絵の画面の白色の具合が調度いい、次の色の乗せ時だと緑色の絵の具を乗せた。緑色の正式名称は GOLDEN 社製の絵の具、この会社は珍しくも USA の絵の具会社、何故珍しいかというオレが若い頃絵の勉強を始めた頃は、いい絵の具は全部ヨーロッパ製だった、ウインザーニュートン、ルフラン、ペリカン、ターレンスもっと有ったかもしれないが今は忘れた、当時値段も日本製の 1.5 倍ぐらい、「いい絵の具だよ」と言われても手が出ないので日本製を使っていた。とはいえ絵の具の質やら発色やらの違いが分かるようになったのは十年も経ってからか、四十歳代になってアクリル絵の具を多用しだすと USA 製のリキテックス日本製のホルベイン等を使っていた、San Francisco 在住の仲野さんが GOLDEN を紹介してくれ、勧めてくれ「油絵具の感触に近い」「粘っこく色がいい」というので 1 本 2 本と買いたした、いまはすっかり GOLDEN の虜になっている満足している「油絵具の感触」はそのとおリズムと重い「粘っこく色がいい」その色はアナログ感があり鈍い発色が心地いい、自分が気に入っている、だからと言って他の人にもいいとは限らないので勧めてはいない。話はそれだが今日使った絵の具は GOLDEN 絵の具 PHTHALO GREEN BLUE SHADE という絵の具を主に、あとから MARS BLACK を少し足す。BLACK はそのほかに BONE BLACK と CARBON BLACK がある、なんとなく違うので使い分けている、濃い黒が欲しい時は CARBON BLACK がいい、薄い黒は MARS BLACK がいいという風に。GREEN をカップにいっぱい作り筆にたっぷり含ませ水気滴る GREEN を画面に走らせた、そこに BLACK を上乗せ、混ぜ交わらせる、これで時間待ち、乾き待ち、半日経つとどんな色になるか、どんな発色をしてくれるか、と思案中にパンクの事を思いだした。

まずは駅前まで歩いて銀行でお金をゲット、車で自転車のタイヤが売っているコーナンに直行、オレの自転車の前後、家族の自転車の前後と 4 本を買った。自転車のタイヤの品番を見るためにシャーロックホームズのように虫めがねを取り出しすり減った古タイヤを調べた、昔ならこれぐらいの字は簡単に見えたのだろうけれども本当に最近は見えないねえ、かすむねえ。以前はスポーツ自転車に乗っていた頃「パンクやタイヤ回りは自分で出来るように」なんて言われ何度かやった事があるので、2 時間もあれば出来るだろうとタイヤ交換を開始。まずは前輪から、後輪よりも簡単にはずれそう、ペンチでグルリと回すが敵もさる者そう簡単には回らない、レンチはと探しまわって「半年前に使った筈」と何度も探し回って「ない、なんで」ともう一度探索、なんの事は無い一番最初に探した箱の手前の隅になおしてあった「よく探せ」と自戒。やはりレンチはすごい、一発でグルリ、前輪を外して古タイヤを外す、タイヤを外すのも昔はもっと難儀したと思ったが今回は簡単に外れ、タイヤとチューブをセットした物も簡単に装着、それを自転車の前輪に取り付けたが以外と簡単スムーズに“簡単”の連続で終わった。二台分の前輪が終わり次は後輪「これは大変そう、バンドブレーキ、チェーンカバーを取りチェーン、スタンドを全部外さねば」順番を間違わないように外した場所にそれらを並べ、ネジやら付属品を丁寧に並べ「ええい、チェーンが外れないぞ」などと悪戦苦闘の末やっと外れた後輪に、前輪と同じ作業は同じように簡単に終わった。「さ、これを組み立て」と並べた順番に差し込み、ネジを回し、チェーンを嵌め、パズルを解くように慎重に事を進めたが、「あ、外れてる」と又も分解、と行きつ戻りつやっと元に戻った。自転車を上に向け、空気を入れ、ブレーキ調整、見た目には元のままの古びた自転車だけれど「中身が違う、良くなった」と自賛。朝からの予定通りに自転車に乗って河原に向かった。

若い頃から「サイクリングヤロウ」という絵を何百枚も描いたかな、最初は風を切るスポーツ自転車のつもりだったが途中から、バイクになり、ハーレーになり我ながら、サイクリングなのかハーレーなのか責任は持てないが、風を切るのには違いが無い、「走ろう、むこうに向かって走ろう」威勢がいい絵だ。

年賀状を書く季節「早く書かねば」「今年はどうする、どんな絵を描こう」「今年の干支は」と周りからの声が聞こえ出す。公民館講座で絵を教えている、その予定表にも11月12月の欄に「年賀状を書きましょう」と自分で書きながらすっかり忘れていた。来年は午（馬）年らしく皆さん馬の絵を何処かから探し出して描いておられる、と他人事のように言っているが、これは怠慢であると自戒しながらも「今さら馬の絵でもあるまい」とノホホンの感。とある絵描きが毎年、十二支の動物を絵にしているのを展覧会で見て真似をしようと、動物の絵を描くのが何年か続いたが、それにも飽きてしまった。その絵描きは須田克太氏だ。彼は毎年12通りの動物の絵を次から次に描いていたようだ、その絵がなかなか迫力あっていいよかった。動物の絵も普段から次の動物はと虎視眈眈にターゲットを絞って、11月や12月にやっと腰を上げるのではなく「早々に準備すべし」と戒めてもう遅いかな。毎年のように展覧会をしてきた、その展覧会の案内状も送らなければならない、多い年には2回も案内状を書いた、年賀状まで手が回らない、「これは節約だ」となってしまう、皆さんごめんなさい失礼しております。

この季節になると所謂“喪中はがき”が何通もやってくる「喪中に付き新年のご挨拶を失礼させていただきます」と書かれている物だ。オレの友人知人の両親や、祖父母が亡くなったと没年齢が書かれているのがほとんどで、我々の歳になれば順番に親が無くなっていくのも仕方が無いと普通に思っていたが、今年は気になるはがきが三通あった。

<塩崎敬子>「薔薇宇宙の洋画家 塩崎敬子は十一月八日 四十六日間の闘病の結果 重症急性膵炎で亡くなりました 七十四歳でした 近親者で送りました 悲しい別れでした ご厚情感謝します」これは死亡通知の葉書、ご主人が送ってくれた。彼女とオレは30歳ぐらいの頃知り合った。「銅版画を習いませんか」という奥山さんの誘いで山本六三（むつみさん・男・父君が63歳の時の子どもだそう）宅へ通い始めた場でお会いしてその後も何度も行き来をする内にご主人の方と仲良く酒を飲むようになり、主客転倒したが最近のご主人とも酒席がなくご無沙汰していた。はがきには彼女の淡い薔薇の絵と並んで写真家の息子さんが写したと思われる顔が載っている、その肖像写真は「穏やかにごんではいる」「微笑ましく愛らしい」オレは嬉しく眺めている。

<啓子ちゃんのおばちゃん>「ご無沙汰を致しております 私も遂に一人暮らしとなりました」このおばちゃんはオレが小学生時代に遡ること半世紀以上前、親父が勤めていた工場の専属医者で先生一家で、ケイコちゃんは一人娘、一つ下の女の子、家にも行き来を、学校に通うのも同じバス、親同士も仲がいい、というような間柄だった。オレの両親は早く亡くなったので知らせるべきもないが、「亡くられたか」と感慨深い。86歳と今時の女性としては若い方だが、オレの母は47歳、父は63歳とびっくりするぐらいに早死にだった。

<向井先生の娘さん>3年ぐらい個展を続けている画廊、来年も3月には展覧会を予定している“シエスタ倶楽部”に居られる絵の先生、花や風景をお洒落なタッチで描く、建築デザインでも有名だとか、その娘さんが39歳で4月に亡くなられたらしい。4月と書かれているのを見て、俺の個展で1000円パーティにも来ておられた、ご自分の教室の展覧会のパーティにも居られた、何度も歓談した、酒も飲んだ、あれは3月4月だったなと思いつつながら、39歳の娘さんの死が書いてあるのを見てしみりした、こういう事を隠して笑っておられた、残念だっただろう。

年賀状は毎年書いたり書かなかったり、これに関しては劣等生だ。ドッサリ賀状をもらって慌てて作った事もあった、展覧会の案内状を書くから年賀状は省かせてもらうと勝手な事を言っているが、たくさんの賀状が送られて来るのを見ると、書けばよかった、作ればよかったと後悔もする。毎年同じような絵、同じような手法の人が多く、官製はがきに官成のデザイン、うっすらとめでたい絵柄、風景が描かれたのがあるがこれは一番つまらない、とは言え、誰もが絵が描ける、字が書ける、版画が掘れる、という才覚を持ち合せている訳ではないのでこれも仕方がないのかな。これは何時も皆さんに言っている事だが「絵描きの年賀状は良くないよ、一生懸命描き過ぎて・・・」「その点デザイン一がいい、人を引き付けるのが上手いねえ」と言いながら、力強い馬発見、描いてみた。

暗黒の中世、暗闇の室町時代とよく言われるが「あれは天皇家、藤原氏一族、百済貴族の末裔にとっての暗黒時代、荘園からの収入が途絶えたこれらの人々の経済レベルが低下した、という事なのです」WEBの先生がおっしゃるのを聞き、ちょっと偏っているかなとも思いつつ、如何にもなるほど。独裁者や独裁組織が思うように国や街を治める、行政も司法も経済も思うように纏め上げていける、その仕組みが堅固に長続きすればそれはいい、それが最高、薔薇色だ。オレも子どもの頃から英雄豪傑は好きだった、平氏に源氏、信長・秀吉・家康と心躍らせたものだけれど、彼らは独裁者で人民の敵、市民の敵という事が今頃わかった。しっかり者の独裁者がいなければ国は滅びるという人もいるけれど、生き生きとした庶民文化が開く、これがその暗黒時代だという。

キヌちゃんから、友人の〇〇さんの展覧会があるので同道しませんかとお誘いが来た、時間的に都合がつかず今回は行けないが、〇〇さんの人柄と作品を彼は褒めている。

大峰奥駈道で4年一緒に行動しています、質素な身なり、失礼ながらみすぼらしいとっていいような身なりです。儲けを考える種族ではないですね、どちらかというと時代錯誤の世捨て人のようです。一休さんかな。「バブルのころは儲かりましたか?」「ああ、あの頃はトライアスロンに凝っていて・・・」てな調子です。たとえば「縄文人というのはな・・・」と話始める。皆には変なやつと思われているようです。山ではすぐ石を拾う。「石が声かけよる、こんな山の中から突然持って帰ったら石はびっくりしよるやろな」ぼくはそんな〇〇さんが好きですが。岡村さんも一度話せばその人柄がすぐにわかると思います。機会がありましたら3人で飲みたいものです。案内の写真にある七地蔵も岩石の中に居はるなあ。作っている時の〇〇さんの顔のまで想像できます。

これを読んで我が友<福永普男>通称ヒゲさんを思い出した。ヒゲとは50年近い付き合い、四国高知、山村の貧しい出身、生涯ずっと“みすぼらしい”と先日話をしていたら、若い頃の小学校の夜警が20年、奥さんも保育園の先生を勤め上げ、夫婦二人の年金額はオレの何倍も在ると聞いてびっくり、貧困さが逆転したようだ。元来は粘土の彫刻を目指していたが絵も描く。絵は若い少女とか娘さんを淡いタッチで描いている、画材に凝り、紙に凝り、作品それぞれ丁寧に仕上げている「なんでこれを売らん」「これは売れるぞ」といつも言っているが動かない、売り込みに行かない。キヌちゃん友人の〇〇さん、陶というより粘土彫刻に釉薬を掛けて焼いた彫刻、一目見た時に「なんでこれを売らん」「これは売れるぞ」と同じように思ったが、どうも売れないらしい。ヒゲは貧乏だ、日々の生活、衣食住はあまりにも構わない、破れたシャツ、すり減ったズボン、住まいも貧民屈でも土間の倉庫でもいい、仕事ができる環境さえあればいい。食う物も粗末な物を旨そうにがつつ食っているが、若い頃からガリガリと体躯は貧相ながら、運動神経はよさそうで若い頃は飛びまわっていた。われわれ手造り仕事をする間柄でよく言う“道具道楽”と“器用貧乏”を同時に二つ持っている稀有な人で、若い頃からあれだけ貧乏なくせに、道具道楽で彫刻の道具、絵の道具などとびっくりするような値段の高い物を買っていた。何でも自分で作りたい、絵描きなら手造りキャンバス、手造り絵の具等に手を出す人は何人が知っている。オレのキャンバスは帆布と言われる元々は船の帆用、ジーパンの布をメーター数百円で買ってきてそれに下地材、白下地を塗って作っている。それ用の木製パネルも作っている、オレの手造りキャンバスは、弛みに弱いから木枠だけでは“ボコボコ”になってしまうのでベニヤ板の木製パネルが必要なのだ。ヒゲさんの事を話しながら、オレも結構器用貧乏かもしれない、自分で解決している部分が「出てくる、出てくる」とこれを書きながら多少はあきれて唖然。ヒゲさんの場合はもっとすごい、若い頃、墨で絵を書きだし「紙、和紙が大事」と俄然張り切りだし、全国の和紙の里を探しては尋ね、ついに楮・三又等の和紙の材料になる枝を仕入れ、それを砕き、紙漉きの桶を作り、ほんまものの和紙を漉きだした。次はブロンズの鑄造を始めた。水島直治くなくちゃん>が本職なので見ているとそれは大変、広い土間、上には稼働のクレーン、鉄や銅を溶かす高温の釜、溶けた鉄を土に流し込んで中味を取り出すと作品が出来あがるが、そんな作業が素人に出来るのかと見ていたが、何年かで何点か作ったようだ。生涯で一番面白かった、素晴らしかった作品は、5メーターぐらいの高さの裸婦像、5体か10体か創っただろうかそれは圧巻だった。考えてみれば、オレも、ヒゲさんも、〇〇さんも、暗黒時代の華なのか。

図版はヒゲさんのブロンズ作品、卵の黄身の大きさ。

本日昼間、自転車で、阪急茨木市駅付近を走っていました。単車に乗った若い警察官が「すみません・・・」「かばんの中身は何ですか」「自転車の番号を見せて下さい」あれれ、又か、ここ3年で3回目です。まわりは人だらけ、オレはニコニコ笑ってカバンの中味の本を見せ、自転車を見せました。元検事の藤田光也君が「警官に言ってやれ、ほんまモンの悪いヤツを捜せ、ほんまモンは、怪しい格好してない・・・」オレそんなに怪しいかなあ、紳士のつもりですが・・・この歳で、警察官に職務質問されるとは、誇らしい事か、不名誉なのか、苦笑のひと時でした。勿論皆さんは、こんな経験はないでしょうね。

20歳台にやられた職務質問は警察官の方が年上なのか、学生運動が盛んだった頃なのか、警察官も陰い顔をしていたが、最近の3人の若い警察官たちは低姿勢で言葉つきも柔らかい、と侮っていると不快な目に会う。なんと言っても相手は司法警察間、官憲、強い力を持っている組織だ、一度牙を剥けばオレのような身分のない人間、地位のない人間などどうにでも料理できる、されてしまうと恐ろしい。変な物を持っていないで良かった、ポシェットの中にはいつも山用のナイフが入っている、いい訳に大変だ。職務質問をされた話を何人かが見ている掲示板に載せた。元検事は仲良しで、お互い酔って十三駅のホームで「トイレ何処」「連れてったる」「久しぶりだ、こんな恰好で連行するのは・・・」とオレの腕を抱えてトイレまで連れて行ってくれた。掲示板にいくつかの返事が来た。

実はその若い警官は頭の良いデキル男で、藤田元検事のいうセオリーは先刻承知ながら、その裏をかき、まったく紳士にしか見えない貴君に、あえて職質したのである、なんて妄想しながら、どうぞ良いお年をお迎え下さい！高畠

職務質問 あれはイヤやな 数年前では開田高原の例の場所で真夜中に経験 若い頃から車で寝泊まりしてたら 数えきれんほど起こされましたなあ それも決まって 真夜中の2時3時 車の窓をノックされる音で ギョッと凍りつくなあ 中西

誇らしい事でしょう～恥ずかしながら、私は一度もありません。ふじた

新米のお巡りさんが職質訓練してきたみたいやね。わざわざ怪しげでもない人を選んだあたり、岡村さんの優しさを見抜いている所が凄い！凄腕の警官になるためのトレーニングをサポートして、日本の治安に貢献やね。またまた若い人を育てることに尽力。ニコニコして対応・・・は、岡村さんにしかできない寛容さ。立派でした！元気なうちは若い人をサポートすることが役割となる年齢やね。楽しいクリスマスと、平和な正月を！やまもと

話は変わるがまたまたオレにとっては嫌なニュースだけれど、皆さんの考え方は如何、どう思いますか。オリンピックが何年後に東京で開催されるらしい、オレはこの事には嬉しくも悲しくもなく無関心だ、オリンピックなんてどうでもいい、芸能ニュースよりはいくらかましぐらいに思っている。ただ日本国中が招致が決まって喜んでいる、その立役者の東京都知事、頑張った猪瀬都知事が徳州会医療法人のボスから5千万円の金をもらったらしい、その5千万円を「もらってない」「もらった」「選挙資金に」「いやただ借りただけ」と返答が二転三転しているらしい、TVに新聞に大騒ぎをしているらしい。さあこういう事になると今の日本人、上手く質問する、上手に叩く、人・集団・組織を倒す事の文化、人・集団・組織を潰す事の文化、これらに長けた、放送人も議会人も、次から次に上手い質問、上手い解説、彼らの持って行きよう目的は潰す事、引きずり倒す事、破壊だけが目的とは情けない。法を犯した者は裁かれるのが法治国家だけれど、5千万円がこの項目だと違法で、違う項目だと合法という違いは何だとは追及しない、選挙に金がかかる、政治に金がかかる、という事は追及しない、この辺りの根本問題は後回しにして、ショー、大衆が目にし知りたがる芸能ニュース的な処ばかりにスポットを当てて、金を稼ごうとするマスメディア、それを喜んで見ている大衆、こういう政治ニュースショーはうんざりだよ。

オレの廻り、極親しく付き合っている二人の友人、そのおっさんが二人とも“朝鮮人”の話“同和”の話になると顔を顰（しか）め「あいつらは・・・」と子ども時代の話、苛められた話、怒鳴り込まれた話、掠（かす）め取られた話、を小さい声で「だからあいつらは・・・」と締め括（くく）りオレは彼らに次を言おうとする話の接ぎ穂が無い。その友人以外にもそういう態度の人は何人も見てきた、その時はこれはダメだと諦める、こういう人には話は通じない説明しても無駄だと思っている。何時も思うが、こういう人たち、所謂大人たちというより熟年老年の人達、この世代で「あいつらは・・・」と思っている人たち、区別差別を頭の片隅に頑なに保存している人たち、そういう人たちは亡くなるまでその保存状態も無くならず、考えも行動もその線に沿っている、消えない消すことができない保存状態に対して、彼らには「オレはもうその話はしない」と決めている。ただ彼らがそういう区別差別の考えを脳に保存している想いを自分の廻りの若い人たち、自分の後継者たちに教え込まない、伝播しないでもらいたいと望むだけ。

姜尚中（かんさんじゅん）著<在日>を読んで。

姜先生はTVでもお馴染み、人柄、話し方、考え方はおおよそ察しが付いていた、去年の講演会でも違和感なく最初から話が聞けた。ちょっと余談を挟みますが、講演会での姜先生の値段、ギャランティは70万円だとか、戦場カメラマンの渡辺陽一郎氏は80万円だとか、ニュースキャスターの鳥越俊太郎氏も同じような値段だとか「へえ、そんなに高いの」と啞然とする値段、それを支払っている茨木市役所もなかなかのもの。有名だ、人に名前を知られている、話の内容その価値よりも観客が動員できる人、あの人なら見てみたいと人を寄せる魅力を持った人、たくさんの人が集まってくれるのがいい、一人でも多くの人が動員できれば成功「そらあそうだ、何をぼやいているのかな、有名である事が無名な事の数倍もいいのは一般常識、世間とはそういうものだよ」オレの様に僻（ひが）んでも詮無い事、絵が売れないのはそれが理由なのだと言っているのですが・・・、長い余談になりました。

「僕は、カンサンジュンと名乗っているが、故郷の熊本に帰れば、テツオ君と呼ばれる、そう呼ばれるとホッとすると先生の弁を聞いた時には、オレの気持ちもほっとした。区別され、差別され、貧困と闘ってきた人の口から出た言葉だ。先生が母親（オモニ）の事を語っているのには「お涙頂戴というか浪花節というか」と言われそうだが、これは紹介したいので聞いて下さい。

幼い頃の母は祖国の祖母に大事に育てられ、しきたりや習俗を何より大切に作る心性を養ったようだ。疑う事を知らなかった無垢な少女にとって女が自分を声高に主張したり、自分の感情をストレートに表現することなど想像もできなかった。目上の人々の愛情に恵まれた母は、きっと世の中を過酷で悪意に満ちた世界と思う事など、とうてい考えられなかったに違いない。だが一度しか顔を見た事がない父に見初められ、父を頼りに住み慣れた故郷から海を越えて日本に渡り、そこで想像を絶するような艱難辛苦の日々を生き抜いていかざるを得なかった母は、内に秘めたる自分の世界を守り続けるためにも、激しい性格の人へと脱皮していかざるを得なかった。過酷な仕打ちと虚偽や悪意に満ちた世界に放り出され「うぶな娘」は何度も泣きはらし、悲嘆にくれながら、世の中と渡り合っていくかざるを得なかったのである。「在日」であり「文盲」であることは、終生母に付きまとった「宿題」であったに違いない。

母は故郷の時間である旧暦の世界で生きていたのである。母は半世紀以上に及ぶ「在日」の歴史の中で、一つの目こぼしもなく、全ての祭儀や法事をやってのけたのだ。そのために払われた労力は膨大であった。料理や祭式の準備だけでも、二晩ぐらいいは一睡もしない時もあったぐらいいだ。明け方までせっせと台所で働いている母の姿をわたしは何度も目撃した事が在る。母の神経症的ともいえる故郷の習俗や祭儀への執着が、わたしの目にはあまりにも不合理に思えて仕方がなかった。先祖崇拜と土俗的なシャーマニズムの世界は、わたしには常軌を逸した迷信以外の何物でもなかったからである。私にはその世界が「在日」であることの不名誉なしるしのように思えてならない。

文盲のハンデで何度も騙されたり、見下されたりしたせいか、母のプライドはずたずたにされていたのである。「第三国人」という身の上だけでなく、文字を知らないという二重苦で人とのコミュニケーションはすれ違いとギャップの連続に違いない。

オレにも母は居たが、こうまでは言えない、語れない、これを語れる彼はすごい。図版はアトリエの片隅、水彩画。

Karl Rosenkranz カール・ローゼンクランツ著<醜の美学>を読んでというより内容が難解でばらばらめくって。醜は本当に厭（いや）しいものだろうか？醜は一点の光もないのか？哲学者や芸術家にとっても醜はポジティブな内容を蔵していないのか？私見によれば、醜は美と滑稽の中間に位置する。滑稽は醜の要素なくしては成立しえない、滑稽は醜から解放され、美の自由へと戻って行く。この論考の随所に見られる美から醜、醜から滑稽へと晴れやかな循環がそれを補ってくれる。

病的快感とは、形而下的の道徳的に腐敗した時代が真の単純な美を把握できず、芸術で軽佻浮薄な退廃的刺激を享受しようとするケースだ。こうした時代は内容的に矛盾する低俗な感覚を好む。前代未聞のこの上なく乖離したおぞましい物を寄せ集めては、鈍磨した神経をくすぐろうとする。支離滅裂な精神状態にある人々は、醜を反芻する。すなわち醜は彼らの負の状態のいわば理想となる。獲物を追い立てる狩り、剣闘士の戦い、好色な肉体の絡み合い、カリカチュア、感覚を軟弱にするメロディー、異常なまでに巨大なオーケストラ編成、文学ではマルミエの言う「汚物と血のエネルギー」そうした時代の申し子である。

長く保たれてきた“真”“善”“美”という美的価値観、根本的に在るもの、美であれ健康であれ善であれ、その本質が在って、美に対する醜、健康に対する病、善に対する悪という概念が生まれる。美学で言う醜、生物学で言う病、倫理学で言う悪、法学で言う不正、宗教学で言う罪、これらをそれぞれ論じる。

この本が書かれたのは150年前、日本は明治維新の少し前、ヨーロッパでは画家は誰が居たのかと調べたらアングル、ターナー、ミレー等の名前が出てきた、絵画の世界はまだまだ具象・写実の時代だ。

“醜い”という言葉で想う事、“醜い”と言われて、オレの生き様、考え方、身の処し方、話し方は醜くくはないのだろうか、他者から見れば美しいと見える時もあれば醜くいと見られる事もある。<醜いやつ>と決めつけられたら「汗顔の至り」などと澄ましてはいられない。あの時はつまらんことを言ってしまった、異様な行動に出してしまった、と数え上げれば切が無いほどに次々と浮かんでくる、これは裏を返せば醜いという事なのか。余談だけれど、憂歌団という歌の仲間の映像を見た、昔から名前は知っていたけれどこんなすごい奴が居たのかと感激「ゲ、ゲ、ゲゲゲのゲ・」鬼太郎の音楽が流れ「がはは、こいつか」と嬉々として見入った。その彼が「えらいことしてもた〜」「えらいこといってもた〜」「でもなんとかなるやろう・・・」とドモリながらのキラキラ顔はいい、美しい。

“醜い”という事で長々と論じる美学とは一体どういうものなのかと思案して、一般常識生活では醜いという表現より、非常識な事、恥ずべき事。実際に形のある物で考えてみると、嫌な臭い、目を背けたくなる物体、聞きたくない音、具体的にそれは何なのだ、どういうものなのだと問われて、思い出したようにいくつかを列挙することができるだろうけれど、一般生活での醜いという表現はいい表現には使わない、批判、蔑視、とがめる時に使われる。これが芸術の世界、美学の世界では美と少し離れた処、美の続き、言い換えれば美その物なのかもしれないとオレの考えは飛躍した。

先生が本を執筆した1850年より少し後に、フランスの官展展覧会の会場で大騒ぎをした事が起きたらしいが、これが先生の言う事と関連しているかいないかはわからないが紹介します。仏の有名な画家Manet(マネ)の描いたOlympia(オランピア-下の図版)という絵を出品した。展覧会場でこの絵の事で大騒ぎが起こったそうだ。今はオルセー美術館に飾られているただの裸婦像、昔から現代まで裸婦像はたくさん裸婦像は有るのに何故、他の裸婦像と変わりはないのに、と今の我々には不思議な話だが解説を聞いて納得した。まずオランピアという言葉は当時のフランスでは娼婦の通称だった事、花束を持った黒人召使が横に描かれている事、これのどこがどうなのか聞くのを忘れたが、一番の批判は身に着けている物がサンダルと首飾りだけの裸婦像がいけないのだとか。当時のアカデミックな絵画の世界では裸婦は神話の話、歴史上の話で登場するだけであって「娼婦がこちらを見つめているとは」という批判だったらしい。とにかくこのマネの話は、今の今まで知らなかった、不思議な話。絵画の世界はどんどん変わっている。今の若い連中が描いている、創っている絵画、造形美術作品は衝撃的で面白い、だからと言ってオレも変わらねばとは思わない、オレはオレをやって行かなければ、オレはオレをずっと引きずって行かなければ・・・。

今年もいよいよ押し詰まり一日を残すばかりになったが、えらい事に“腰痛”になってしまった。所謂“ギックリ腰”ではなくてというのは、ギックリ腰は50歳代に二度も経験している「あああ これはやばいな・・・」と思った矢先にグラリと来て、あとは痛い、動かせない、立てない、歩けない、という情けない状態で、二度とも我家の隣の整形外科に駆け込んだ。今回はそれとは質の違う腰痛、立って、歩いて、走れるが、座ると痛い、で思い当たるのが先日の窓掃除、とある先生の家を覗いたら一生懸命建具を外し、洗剤を使い、タワシで擦り、水を掛け、大掃除の真っ最中「これはオレも・・・」と「まずは網戸を外して」と取りかかったがカタカタいうだけで外れない、上へ下へ右へ左へと何度しても外れない、「あれえ おかしいなあ」と思案しながらサッシの上の方に貼ってある注意書きを見た、とすんなりとはいかずまずは老眼鏡を取りに行き、上の方に書いてある小さい字を見ると「下についている小さいボタンを両手で中の方に押すと外れる」と書いてある。「なんだ」簡単に外れたが、何時も何時もこういう説明書を読まないのは悪い癖だと苦笑。次にガラスの入ったサッシの番、網戸に懲りて説明書を読むと「落下防止用ロックを外すためには、ネジを1回転せよ」と書いてある。ドライバーを取りに行きネジを1回転させて、両手でぐいと持ち上げたがびくともしない、この重さは下手に足の上にも置いたら大怪我をすと思って、雪用の登山靴を持ち出して履いた。右を持ち上げ左を持ち上げ何度か試すうちにようやく外れたが「重い重い」そろりと登山靴の上に置いて、右へと運んで横向けに倒し、そろりそろりと水場へ運んだ。やっとの事でもう1枚も外し洗剤を付け、洗い、水で流した。さすがにもう一方のサッシを外して同じように水場に持って行く元気もなく外からホースで水を掛けて洗った。外したサッシを元に戻すのに「持ち上がらない 上手くは入らない」でサッシを持ったままで家人が帰るのを5分ほど待ち二人で右へ左へとやっているうちになんとか収まった。建築屋のおっさん達はあんな重い建具を軽々と持ち上げ、ひょいと嵌めこんでいた、次から次に運んできてはひょいと嵌めこんでいた、慣れているとはいえ彼らは力持ちだと再発見。二日ほど経って車の運転をしながら腰イタが徐々にきつくなり、昨日今日と「あいたった」だ。年末に雪の比良山に登りたいと思っていたがこれではなかなか無理だ。

パソコンを買い替えた。この文章はまだ古いパソコンで書いている、6年前に買ったものだ。20年前の最初のマックは車一台分ぐらいの大枚をはたいて買ったが、それ以降は自分で組み立てたり、廉価品専門の店で買って、友人からもらったOS-windows やソフトを入れて使っていたが、6年前の物は最初から色々な物がインストールされ一応快適に動いていたが、5年を過ぎた頃にフリーズして動かなくなった。メーカーに電話すると「それではメモリを外して下さい」「次にメモリの場所を交換して下さい」「電池を外して下さい」そのようなやり取りが1時間程あって「修理ができそうなので申し込んで下さい」指示通り2万3千円を払い込んだら翌日運送屋が大きな箱を持って表れパソコンを持ち帰り半月ほどしたら修理されて帰ってきた。「あんな物が直るのだ」と喜んだ「安いものだ これではしばらく行ける」と感動した。「パソコンは5年を過ぎると何時潰れてもおかしくないよ」という友人たちの言葉が気になって新品を買った。Adobe系のソフトが上手くインストールできるか心配だったがこれも何なくクリヤー「美術関係はモニター 少しいい物を使わないといい色が出ないよ」とうるさく言われる、オレも「色が出ない」苦勞のしっぱなしだったので、少し高いモニターを買った。まだまだ本格的に使っていないが、今の処新しいパソコンはなかなか快調、動きもいいし、色もきれい。今年はカメラも買った、これも快調、資金不足の折、金食い虫がいっぱいだ。

この何日かで絵も3点仕上がり気持ちよく今年が終わりそう。そうそう“111213”のサインをしなければとその日が過ぎた何日かに筆に黒色を含ませてサインしたが“151213”と無意識に書いてしまった「俺の誕生日じゃないか」と悔やんだが「これもいいかと」とその何日か先に出来あがった物に“111213”のサインをした、これぐらいの不正は見逃してね。腰痛以外は元気だ、腹が減る、飲める、走れる、わがままばかりを申しまして「皆さんごめんなさい」の年末です。来年もよろしくね！